

茨城の教育

第一部 現状

園遊も身合い、土浦市内を見下す高台に、旧制中学の伝統を強烈に感じさせる古風な二高の運動がある。一高は真南陽一の名門校といわれ、受験、筋の教育方針で、県内外にその名を知られている。

進学競争

して、これを要諦として自己を進めさせることができなかったら、七十周年はまったく無意味になるであろう。真の意味における本校の強運は、ただ諸君の現在の胸中にある」(土浦一高「進学要説」)

成績順にクラス

ここでは入学の時、試験が二層ある。入学試験と合格者テスト。合格者テストは、合格発表の二百後に実施されるクラス編成試験だ。試験科目は英、数の二教科。この試験の成績で、上位五十人が「優組」、つぎの五十人が「準優組」残りの三百人はならして、六つの「普通組」に振り分けられる。

二年生を鍛える
——二年で、競争激戦から脱落するものが多い。これは致命的で、三年でがんばっても一度下がれば、二度も解決できない。二年生をどう鍛えるかは、本校における最も重要な課題である。息切れがして、方向を一度変えたら、勉強はそれで終りになる。(中略) 諸君は七十周

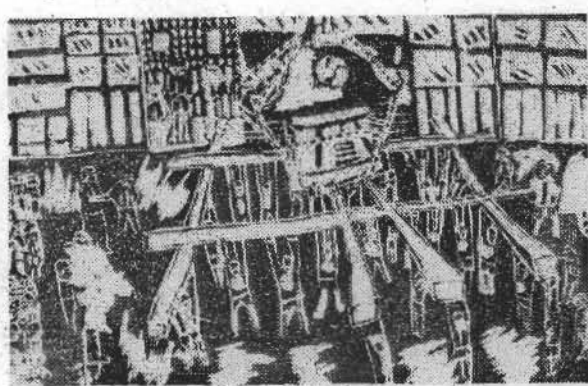
「入学の時の父兄の関心は、一高にはいるとどうなるか、優、準優にはいるかどうかにあるようにです」といのは教務主任の出頭演説。授業の進度、問題集の量など、両クラスは特別扱い。国立二期をめざそうと意気は、両クラスにはいれ

なければ事無理。二年、三年になる時、年末の成績で「優」から「普通」に、「普通」から「優」へ多少、入れかえがあり、三年の十月になぞ、四百人は国立直進科、国立文科、私立理科、私立文科の四クラスに特別編成され、三クラスへの体制にはいる。

この学校のもう一つの特徴は、二、三年生に課せられる週一回の七時間授業。ほかのどの時間、授業を設計にやわわけた。一水戸一高に比べて、また生徒の質は落ちます。たかつか、時間をかけて引ばって行かないと、年々激しくなる競争には勝てません。田中一級校長はこもはけてい

息切れたら脱落

すべてを犠牲に特訓



版画は「働く人」 猿島郡境小4年 武藤 昇

でも二千回を教える。稲見敏 してはいってきただから... 進級は「生徒の全面的な地位」をきかみ、正しい進路指導をす「普通」から「優」へ多少、入れかえがあるためだ」と説明する。全面的 奪つていふ仲間がいると、落 生。またある先生はこうい

「東大合格者七人の 輩」が破れない。龍力別編成によつて、素質のともなわ ない優越感があるこ と、馬車馬のよう に、ギリギリまで方 を出し切っているか らだ」運動部の先輩 たちは口をそろえ

る形になり、この時から、土浦 周辺の優秀な中学生は、水戸一 高に誘われ込んだ。土浦一高 は火が悔えたようになつた。

名譽への執着
当時同高の教諭だった菅沢氏 は考えた。「このままでは伝統 が破れ、母校の名譽をあげるた めに、土浦一高からも東大に行 ける素質を作るのだ」。龍力 別編成、延長授業、テスト体制 ……氏は馬車馬のようにがん ばって来た「高校野球も一回戦 ぽいになった。全人数が薄 れてきたとの批判も聞いている。決して大成とは思わな い。だが、だれかがやらねばな らなかった」菅沢氏は自己批判 めいた回顧をした。

この学校の進学体 制をこまめに育て上 げたのは、長い間同 校の教頭をしていた 現水海道一高校長菅 沢虎彦氏をいふとい われている。八学区 の中学区制でスター 卜した高校進学区 は、町村合併のた め、三十年前「隣接進学区の 高校にも入学できる」と改めら れた。このため、水戸を中心と する第三学区には第六、八学区 以内の県内のどこからでも行け

地位をつかむため、養兵衛、 栄光(神奈川)など他県名門校 の偵察も、おさねさかりない。 馬車馬のように ころした体制について「承知 しているが、少し恐ろしく、昔

競争といふ目で見ちゃうし、 クラスなんか分ける必要はない と思つた」普通組の二年生、 「成績のいいものはセンターし てるが、少し恐ろしくなると、昔 以内の県内のどこからでも行け

題字は日本版権協会
香取 彰水戸一中教諭